

平成29年度第4回 習志野市子ども・子育て会議 会議録

【開催日時・場所】

平成30年3月19日（月） 17時00分～19時00分 市庁舎GF会議室B・C

【出席者】

（委員）※50音順

飯塚委員、伊藤委員、稲垣委員、倉信委員、小西委員、高橋委員、臺委員、田久保委員、中村委員、横澤委員、米本委員

（市）

竹田子ども部長、小澤子ども部次長、鶴沢子ども保育課長、木村子ども部主幹、伊東同課係長、秋田同課係長、久世同課指導主事、安達子育て支援課長、橋本同課係長、鈴木同課係長、奥井同課係長、芹澤児童育成課長、北澤同課係長、児玉健康福祉部主幹、大久保健康支援課係長

（事務局）

小野寺子ども政策課長、藤代同課係長、松岡同課係長、伊藤（幹）同課主任主事、高地同課主事

【傍聴人数】

1人

【次第】

1. 開会
2. 資料説明
「児童福祉法等の一部を改正する法律案の概要」について
3. 議題
 - (1) 子どもの生活に関する実態調査について
 - (2) 平成30年度の主な新規・拡大事業について
4. 閉会

【配布資料】

- ・資料1：参考資料（児童の権利に関する条約・児童福祉法の一部を改正する法律）
- ・資料2：習志野市子どもの生活に関する実態調査について
- ・資料3：2018年 習志野市「子どもの生活に関する実態調査」からの一考察
- ・資料4：平成30年度の主な取組み

1. 開会

2. 資料説明

「児童福祉法等の一部を改正する法律案の概要」について

<小野寺こども政策課長>

資料に基づき、「児童福祉法等の一部を改正する法律案の概要」について説明。

<稲垣会長>

児童福祉法は、大人たちの責任で子どもたちの幸せを守ろうという理念のもと、第二次世界大戦後に施行された。しかし、子どもは家族の責任において育てるべきという従来の考え方があったため、なかなか社会に浸透するのは難しいところがあった。国内的には児童憲章を定め、日本は大人の責任で子どもの幸福を実現するという考え方に基づいた法律により、子どもたちを守る制度を作った。しかし、子どもの権利条約はさらに一歩進んで、大人たちが考えるだけでなく、可能な限り子どもたちの意見を聞こうということで、子どもの意見表明権を認めるようになった。

従来日本は大人の責任において子どもの幸せを守ることで法制度をつくっており、子どもの意見を聞くようなシステムになっていなかったため、ここ2、30年かけてそれを少しずつ子どもの意見を聞くことができる形に変えてきた。

したがって、この会議も含め、「子育て支援」会議ではなく、「子ども・子育て」いわゆる子どもが主体的に自分達で育っていくことや幸せになっていくことを一緒に考えた上で、「子育て」すなわち保護者の方たちがお子さんを育てることの支援をしていこうということである。現在の子ども・子育て支援新制度のように、子どもが前に立って子どもが育つことの支援をさまざまなところで考えるようになったのは、1994年に子どもの権利条約に批准をし、日本はこども主体で可能な限り子供の意見を聞きながら子どもたちの幸せを考える国になる、という誓約をしたためであり、それに沿って国内法を順次変えてきた。ある程度の準備が整ったため、根幹法である児童福祉法を大きく変えていくことによって、整合性を取っている。

今事務局から説明があったように、ポイントは、国内法であるが国際条約でもある子どもの権利条約の理念を反映することを誓約した、世界的に約束したことを国内法で実現していくこと、そして第2条の、その意見が尊重されるというのは子どもの意見が尊重されるという意味であるということである。本当はここにお子さんたちが参画してくるという事が完成形だと思うが、今のところは、子どもを守る保護者や、専門職など、それぞれの立場から、子どもたちの代弁をする形で、可能な限り子どもたちの意見をこの子ども子育ての様々な施策制度に反映していくことが、この会議の趣旨にもなっている。

会議にお越しになる時はこの近くにいるお子さんたちの声に耳を傾け、またご意見を頂きたい。

3. 議題

(1) 子どもの生活に関する実態調査について

<小野寺こども政策課長>

資料に基づき、習志野市子どもの生活に関する実態調査について説明。

<稲垣会長>

データというのは見方によって評価が変わるため、あくまでも一時的な集計結果から見える傾向について説明いただいた。国全体で子どもたちが経済的に厳しい状況に置かれていることにより、いろんな経験が乏しくなっていくことが問題視されているため、この調査でもひとつ子どもたちの状況を確認するときに、世帯の経済状況を一つの指標とした。ただここで気をつけてなければならないのは、「だから経済的に課題のあるお宅のお子さんが問題を抱える」といったラベルを絶対に貼ってはいけないという事である。確かに経済に起因するところの課題は起きやすく、行政にはすべての子どもたちの生活を保障していく責任があるため、どこに自分たちの責任点を見出さなければいけないのか、そこに関して皆さんから意見をいただくためにこうした調査の集計をしているのであり、ラベルにしてはいけない。

この調査結果については、これまで習志野市の子どもたちにかかわる調査に継続して関わっていただいている臺副委員長にお渡しし、習志野市の特性等とも関連させながら、今度は先ほどの結果に少し考察を踏まえ、説明を加えていただきたいと思います。

<臺副会長>

あくまで一定の角度から分析したものであり、いろんな捉え方があるかと思うが、こんな考え方や見方もあるのではないかというものなので、これが確定的のものだと捉えないでほしいことをお断りし、少し説明をしたい。

貧困は、経済的なことはもちろんだが、尊厳が脅かされ、身分や階層にも様々な変化を伴うものとなる。「だから貧困の子は」という様な偏見を避けなければ、それがまた悪循環に繋がることになるし、貧困の背景を捉える時に、何が原因であると結果がはっきりしていくものとは限らない。おそらく今の社会のいろんな現象は、いくつかの背景が複合的に絡まり、結果、貧困という現象になっているという事も、皆さんに前提としてお断りしておかなければいけないと思う。

データをトータル的に見ると、習志野市が特別全国から飛び出して課題があるというようなものには見いだせなかったというのが大きなまとめになる。言うなれば、標準的で、全国と同じような課題を抱えているという言い方もできると思う。そのあたりの全国と共通する様な課題ということでいくつかピックアップした。

まず、大きく結果の背景への考察という事で、社会経済的状況、つまりは貧困という事で、3つほど視点をあげた。

1 点目は、基本的な生活習慣という事で、朝食の摂取率というのは、生活背景に限らず、今、夜型という事もあり、ここに貧困という事が加わると、子ども食堂という事で皆さん社会的動きをとらえていると思うが、食事に切り詰めがいき、食事より睡眠といったものが反映されている。ただ食べているかという事で今回の調査は捉えているが、中身を見ると、お菓子だけを食べているという事もあるため、単純に食べていれば安心ではなく、実態が何を食べているのかというのは今後注意を払っていただきたい。ただし、朝食、睡眠等に代表される基本的な生活習慣は、年齢が小さければ小さいほど家庭の生活の仕方に影響をされていくと思う。今回の調査で言えば、小学校の方が家庭の親の生活態度に引きずられる影響が大きいですが、中学生になれば、自分で楽しいことをやって夜更かしをした等、そういうところの困

子が大きくなっていくので、これを踏まえて捉えていく必要がある。生活リズムも、当然夜更かしの子は朝食を摂取しにくく、ギリギリまで寝ているので食欲がわかず、食べる時間がないのでそのまま学校に飛び出していくということで、生活リズムと朝食は、今の社会の在り方と全般に反映していくと理解していいと思う。運動習慣には、いろいろな捉え方があると思うが、小中学生の運動習慣は、我々大人と違い、体育や部活で代表されていると思う。今回の調査結果を少し詳細に見ると、中学生の運動習慣は少し減っているが、経済状況によって、貧困家庭の方が少ないという事が実は少し特徴的であると思う。受験の影響等、いろいろ考えてみたが、まだ中学校2年生である。そうすると、部活に参加する割合というのは、もしかすると、部活で道具を揃えなければならないことや成長期であるためユニフォームや道具も体格に合わせて買い替えなければならないこと、遠征に行くのに交通費がかかること等、様々なところでの経費の出費を考えると、そういった背景が中学生あたりの運動習慣に影響を及ぼしているのではないかと考えた。

2点目は、健康である。これは世界的な傾向で、貧困と健康は社会的な格差という事で、勝ち組・負け組という事がマスコミでも言われている。このような所と健康が密接に関係しているという事は、世界的な様々な統計で明らかになっている。つまり、貧困の人ほど健康の度合いが低くなるという事が言われている。このため、子どもの調査あるいは保護者の方への調査も、同じような傾向が示されていると受け取ることができる。いろんな資源にアクセスがしにくく、病院も痛くなるまで行かなくていい、歯科受診の点でも予防的にフッ素も塗った方がいいけれどお金をかけて行くよりは痛くなったら行けばいい、というような発想にどうしてもなりがちになるので、健康の度合いが貧困ほど下がることになる。当然疲れやすい、ギリギリまで我慢しようという事なので、主観的健康観は、自分が健康かどうかをどうとらえているか、実際の健康データとは別にしているということになる。端的に言えば、疲れやすいとか、なんとなく調子が出ないという言葉に言い換えてもいいと思うが、これを放置すれば、当然将来的に健康が蝕まれ、子どもの時期は大人に向けての健康の土台が作られていく時期であるため、この時期からきちんと健康を作っていくことができれば理想的である。そして特に端的に出てくるのが虫歯と肥満と言われている。世界的な統計をみると、貧困家庭ほど、虫歯の保有率が高い、治療の割合が低い、それから肥満の割合が高いと言われている。これは治療の事もあがるが、肥満は先ほどの食生活とも関連がある。要は、安くて少量でお腹を満たせる、あるいは安価でおなかを満たせるジャンクフードやスナック、冷凍食品等の傾向が高くなるので、貧困と肥満というのは関係しやすいと一般的にも言われており、習志野でもその傾向が明らかだと言えるのかもしれない。

3点目は学習についてだが、この調査は5年生だが、小学校2年生くらいで掛け算が始まるなど、実は低学年あたりから少しずつわからないと思いつつながら、そのまま放置された結果が5年生であるいはより高学年についていけなくなるというような、貧困と教育格差もまた連動していると言われている。早期にこれを解消しなければ、また貧困が再生産されていくという事も言われているので、これは各家庭の責任だけに押し付けずに見ていく必要がある。

また、全体のデータを読み込んでいくと、習志野市内でも少し地域の格差がある。おそらく経済的な格差、あるいはいろいろな住まい方の違いという事もあるのかもしれない。ここは地域差という事にも着目し、市内一律に支援することよりも、必要性の高い地域を優先的に支援するという考え方に繋がっていくかもしれない。

結局、生活習慣・健康・学習等は、1つ1つバラバラなものではなくて、すべて連動していく可能性

が一般的にも言われているし、習志野でも例外ではないという事が結果を単純に捉えただけでも言えることである。

ここからは、皆さんでディスカッションの一つの素材にさせていただければということで、今後の取り組みへの一考察として、4点ほど提案させていただきたい。

1つは、結果から見てきたことで、子どもの居場所づくりの必要性である。実は昨日、習志野ではない所の学童の方たちと仕事の話をした。どこも全国的に似たような課題があるが、印象的だったことがある。狭い空間で子どもが生活をしていくと、家庭的にいろんな背景の子どももいたり、発達に課題のある子どももいたり、いろんな状況がある。そうすると、実は学童の支援の先生の骨折や怪我が多いという話題があった。要は、先生が注意すると反抗されてしまうことがあり、学年が上がれば支援員の先生の大きな怪我が繋がっていることもあったと言う。様々な複合的な背景があるのはご理解いただけると思うが、年齢に応じた発達があるため、今の学童の在り方だけでは難しさがあるかもしれない。そして、同年齢とのかかわりも大事だが、先ほど地域活動という言葉もあったように、異年齢と交流することによって自分が将来育っていく居場所になったり、逆に地域の知らないおじさんお婆さんからたしなめられることあったり、家族だと聞けない話もああそうかと聞けたり、いろんな経験をする場になる。ぜひ地域特性を生かした居場所づくりを、今後さらに検討重ねるといいと思う。

2点目は、教育・福祉・保健が連動しながら、ワンストップサービス化を図ることである。乳幼児期では、習志野は手厚いと思うが、学年が上がると教育に主導が移ってしまう。しかし、例えばスクールカウンセラーの先生が、不登校の相談として受けたとしても、不登校の背景にいろんなことがある。例えば貧困や家庭のこと、保護者の病気といったものが潜んでいるときに、教育委員会の中だけで済ませることができないことが増えている。このようなときに、役所の福祉・保険の部門と連動できるかどうかということが、非常に大事になってくると思う。例えば、困っている人は、何に困っているのかを整理できればその窓口に行ける。困っている状況がわからないからこそ、路頭に迷うということもある。困っているときに行けば整理をしてくれるところ、これがワンストップサービスということの大事なポイントになってくる。また、困っている方こそ、情報を理解して行うことが難しく、支援を受けたいのに諦めてしまうということがあるので、こういったこと起こらないようにしていくことが大切である。そしてもう一つは、日本人の生真面目さでありお年寄りや生活保護の方も言っているが、支援への抵抗感である。役所の世話にならないようにギリギリまで踏ん張りたい、これは尊い気持ちであると思うが、一方で市民として困っているときには受ける権利でもある。当事者だけでなく周りの人の偏見が支援を受けることへの抵抗感を増すため、市民全体で「困っているときは受けたらいいじゃない、だけど脱出できるように皆で手を携えようよ」という地域社会のあり方が本来望ましいものである。まず、困っている方たちが困ったと言える窓口を一層充実できるように検討したらよいと思う。

3点目は、地域力の向上ということである。この辺は、保険分野の方達が詳しいかと思うが、ソーシャルキャピタルということで、端的に言えば「ご近所の底力」である。どうしても我々は困っている人だけに目を向けがちだが、家庭の責任ではなく社会全体で、地域の助け合いの力があるところほど、子どもの成績が良いとか、中退率が低い、犯罪率が低い、住民の人が健康である、孤独死が少なく早く見つけやすい等、色々な効果が世界的に言われており、今これをどう高めていくかが着目されている。どうしても、我々が施策や支援を考えるとときに、高リスクアプローチということで、困っている人や特別な人に目を向けがちだが、これも一定の効果があるけれど、保健活動でも効果の頭打ちがあるといわ

れている。地域全体の底上げをすとか、リスクを地域全体や自治体レベルで見、皆のレベルが上がればリスクのある人たちも救われていくという考え方が、このハイリスクアプローチ／ポピュレーションアプローチであるので、両方ということになる。困っている人には重点的な支援をするが、地域全体で何か取り組みをしていく、両方があってこそということになる。そのために、庁内・市民を巻き込んだ相互理解ということで、どうしても支援を何か、と考えていくと、行政に何とかしてもらわないと、というような論調になりがちだが、市民の方達も市民としていろんな支援を受ける権利もあるが、一緒に考える義務もあるので、一方的に主張をするだけでなく、行政と共に子どもも交え、どのような街をつくっていったら良いのかを考えていくことが大切である。

最後に、こういった支援を考えると、公平や平等という言葉が出てくる。同じように、公平に平等に支援を届けなければと考える機会はよくあるが、もう一方で、皆が同じ状態になるような公平平等、同じようなサービスを皆が受けられるだけではなく、同じ状態にしていく公平平等という考え方もある。そういう意味では支援の濃淡がある程度出てくるという考え方もあるということ、今後考えていくときに頭の中に入れておいていただきたいと提案したい。

<稲垣会長>

いろんなところで行政の仕事をしているが、調査の結果を見ると、習志野市の特有のことではなく、今多くの地域が抱えている課題が表れている。そして、大事な指摘だったと思うのは、経済的な課題は、個人の責任でのみ起こってくるものではないということである。公平・平等ということも出てきたが、限られたお金が誰かのところにたくさん集まるということは、持っていかれた人は経済的課題を抱えることとなり、これは資本主義経済の逃れようのない仕組みである。私たちはこの仕組みの中でいろいろな課題を抱えやすく、一方で氷の上で暮らしているような不安定さもある。だからこそ、たくさん儲けた人が税金や保険料を多く支払い、それを困った時に還元していく安全を図るシステムを持っている。しかし、病院に行きづらい人は、経済的にお金が十分に無いために保険料を払わなくなり、保険料を払っていれば3割負担で病院に行けるところが、払っていないので全額負担になってしまって足が遠のき、病気を重篤化して働くことができなくなり、所得がなくなっていく。このように、いろいろなことが絡み合って経済的な課題が起きている。経済的な課題をラベルにせず、いろいろな社会的の状態があっても、私たちみんなの知恵と力を絞り、子ども達にいろいろなことに挑戦するチャンスを公平・平等に提供することができるように、できることを私たちでしていきたい。そのためにこの調査の結果があるのだと思う。後半部分では、これから私たちがいろんなことを考えるときに、それぞれの専門の立場から、また、子ども達の声を代弁してもらうときに、こうした視点から考えていくとよいという提案だったと思う。大事なことは、困っている人の課題をラベルにせず、皆でそれをどうやって変えていくのかである。地域の様々な生活課題を全部含めて、保健・医療・福祉・教育、あるいは司法等、人の暮らしに関わることを全てまとめて考えようというところで「包括的な支援」、地域福祉のフレーズでは「我がことまるごと」と言って、他人事としないで我がこととして地域のことを考えようというものもある。こういう視点を持ちながら、今回の調査結果から、私たちが次の計画に向けてどのように咀嚼をしていくのかという解説をいただいた。

皆様の立場から、次の計画に向けて意見交換をする中で、知りたいことや大事だと思うところ、取り入れてほしいことなどがあれば、発言いただきたい。

<飯塚委員>

主観的健康観とは、どんな意味があるのか。

<臺副会長>

健康は、検診のデータや数値で表されるものから度合いを測る方法もあるが、一方で、検診結果がなんでもないがいつも元気がなく優れないという状態もあり、これは本人の受け取り方による部分がある。障がいや病気があって先が真っ暗だと思う人もいれば、薬やいろんなものを使いながら自分は仕事に励んでみようと思える人もいる。このように、健康に対して客観的に表れるデータに対し、個人の受け取り方による部分があり、本人が自分の健康をどのように捉えているかということの主観的と言う。実はここに注目することが、体の検診データよりも、その人に生きがいや生き生きした感情が活動性と密接に関係していると言われている。体の検診データで何もなくても、本人が本当に自分は元気がないと思っていると、活動性を落とし、幸福度を落としてしまうと見ている。数値化されるデータと共に、本人がどう捉えているかを見ていくことも、幸福度や活動性を見るときを目安と言われている。

<稲垣会長>

量が何パーセントと言われるとわかりやすいが、だからと言って同じ結果ではなく、体脂肪率はあるが動けるといふ人もいれば、痩せているのに太っていると気にする人もいる。量と質というところで、データをどこからどう見たときに何が見えてくるのか。人間は感覚で生きているところがあり、量だけで見ると、大事なところを見失ってしまうという反省から、こうした主観を大事にしようということである。従来は、科学的なのが客観的という考え方だったが、私たちは思いをエネルギーとして生きている部分がある。子ども達は、嫌なことがあるとお腹が痛くなることもあり、病は気からという言葉もあるが、心が元気なのかが体の健康に関連していたり、結びつきもよくわからないところがあったりするので、丁寧にその部分を見ていこうということである。

<田久保委員>

調査結果の中の、子ども達の意識調査の中で、「将来の夢を持っている」、「目標を持っている」、という人が多かったのは、とても嬉しく感じた。

臺先生の考察で、子どもの居場所づくりの提案があったが、子どものニーズにあわないと、せっかく良いものをつくっても使ってもらえないと思う。子どもが市内に欲しいもののアンケートを見ると、大型ショッピングセンターが1番となっており、大人に教えてもらう場所は欲していないという結果が出ている。何をつくるかを考えることが必要で、一方的な押し付けになってしまうと使ってもらえなくなってしまうと思った。

<稲垣会長>

楽しいと思うことがどういうことなのかということもあるが、子ども達は、子ども達の環境との相互作用でニーズを見つけていくため、体験していないことに対して興味は湧き起ってこない。政策の連続性を持ち、例えば教育の中でそういう視点や方向性をつくってもらい、それを探検できる場所を地域につくって、友達との居場所にしたり、活動を続けたりと、全体的に仕掛けていくことも必要だと思った。

<中村委員>

私は家で、家庭文庫をやっているのですが、図書館や本関係のことに目が行くが、市内にあった方がいいと思う場所の中で、小学5年生において、図書館で過ごしたい人が多いことを嬉しく思った。習志野市は今度、藤崎図書館が無くなってしまふということ、周りの保護者の方も残念に思っていて、私の家の家庭文庫を利用している人の中にもいる。北海道で経済的に厳しい市等で、家庭文庫を推している

ころがあり、補助金をだしている。公共図書館は資料や調べ学習の場所として特化し、読み物は家庭文庫や地域の文庫等を使って、少額の補助金でやっているようである。習志野市でも、図書館で過ごしたという子どもがいるようであれば、そういった家庭文庫や地域の文庫を居場所として推していけると嬉しいと思った。

<稲垣会長>

私も調査結果を見たときに、このことについては嬉しさを感じた。そして、私たちが一辺倒になりがちなところを子ども達が掻き分けてくれたと思ったのは、今、ほとんどが IT 化しており、デジタル化していくことが合理的で、情報をたくさん提供できる場所だという考えがあるが、子ども達がアナログな紙の世界に触れたいと言ってくれたのは、とてもどかな文化性を感じる場所である。子ども達が多様に思考を広げていくときに、ストーリーを行きつ戻りつ旅をすることは、とても大事であり、子ども達が何か疑問に思った時に別の本を取りに行く等の多様性については本の方が持っているということ、調査結果から思い起こした。その本を、こういった空間にどのように置いたら子ども達のニーズになるのか、そういった仮説を立てながら、この調査結果を、子ども達にフィードバックしながら見ていくことが大事である。

<中村委員>

私の家庭文庫に来た方で、いずれ家庭文庫をやりたいという方もいる。漫画をお子さんがたくさん集めていて、その中の良いものを貸し出すという、漫画の家庭文庫をやりたいという方もいる。子どもはそういったものを欲しがると思う。文庫を管理している方がおすすめのものや並べたようなものもあるので、そういったものを推していけたらよいと思う。

<稲垣会長>

ご近所の底力で、市民参画で新しいアイデアで作っていったらという素敵なお提案だったと思う。

<小西委員>

ソーシャルキャピタルという言葉があったが、私の今住んでいる地域がちょうどそのような活動をしているので紹介したい。

秋津小学校はコミュニティスクールという事で、小学校と地域の方々が連動して、運動会や秋津祭り等のいろいろな活動をしている。学校を一部開放し、鍵をコミュニティとPTA会長と地区の人が管理をして、それぞれが空いている教室を使って、算数教室や太鼓の教室等をやる等、自由にいろいろな活動をしている。ちょうどその場所が放課後児童会の教室のすぐ後ろにあり、算数教室や絵画教室、凧揚げなど、地域の人たちが中心となって活動をしているお知らせの紙が毎月学校で配られている。学童に限らず子ども達の学校が終わってから、もう一度学校のコミュニティの場所に来てそれぞれが活動している。これも全部地域の人たちが中心となってやっており、例えばビオトープの整備等は、PTAから予算は出ているが、地域の人たちが子どもたちのために整備を行い、お祭りのお神輿も地域の人たちが中心となって作るなど、子どもと学校と地域の人が一体となって活動している。子どもたちも楽しそうにしているのが印象的で、周りにも秋津に住んでよかったという方が多い。できるならば、他の地域の方も秋津の取り組みを参考にさせていただけたらと思う。

<稲垣会長>

とっても元気のでるご意見を頂けたと思う。先ほど臺副会長が、学習のところで地域差という言葉を使っていたが、課題だけではなくて、地域力とか地域特性での地域差というのが、そのバランスの中で

生活課題の支援の必要性、介入の必要性のコントラストを持ってくる。今の御意見により、地域はこんなに力を持っている、地域の中にこんな資源があるとご紹介を頂けたのは、「習志野市まだまだ使えるものはいっぱいあるぞ」、「子どもたち待ってる、頑張るぞ」、といった気持ちにさせていただいた。

<横澤委員>

子どもたちがこれからの時代で成長していく上で視野を拡げることが必要ではないかと思う。例えば、私の場合だが、中学のころに読書に目覚めたが部活のために時間がなく、結局大学になるまで読書の時間が取れなかった。もし中学時代に本の虫になっていたら、どんな風になったのだろうと思う事がある。その辺が今の学校はどのようになっているのだろうと気になっている。もちろん、本を読むことが全てとは思わない。先ほどの地域力について話をすると、私の住んでいるマンションには色々な経験をされている年配の方がおり、他にも習志野市にはいろいろな経歴を持っている方がいる。これからの時代を生き抜いていく上で、そういった方達から子ども達が話を聞く機会を頂く等して、視野を拡げるというのは重要なのではないか。

<倉信委員>

私が日頃考えていて、今回の調査で改めて思ったのは、習志野市は他県や他市と比べても学校教育や社会教育が充実しているということである。そして公民館などの行政サービスも、子どもたちのためにいろんなことをやっていたらと感じている。この調査の結果も、そのような事が表れていると感じた。一方で課題もあり、それは今言って頂いた事もその一つだと思う。あとは、しっかりやっている事柄の情報を、もっと出していくことを考えていかなければいけないと思う。

<稲垣会長>

教育現場ではいろんなことを模索していく中で、子どもたちに安全で多様な学びの場を提供していくのは、地域の協力と理解がなければ成立しない。地域全体で子ども達が学校での学びを中心としながらそれを拡げていき、子ども達が自分で居心地のいい場所を選択できるように安全なエリアを作っていくことのできる、どこに住んでいても公平にその情報や知的な刺激と出会うことができるチャンスを保障していくことを考えていかなければいけないと思う。

IT化していくと、情報が画一化してしまう傾向がある。便利な道具が子どもたちの思考の拡がりを偏らせてしまうという事に気をつけ、子ども達の視野を拡げるために環境や知的な刺激との出会いをどう増やしていくという事を、これからの会議の中で拡げていけるように事務局にフィードバックしていきたい。

(2) 平成30年度の主な新規・拡大事業について

<小野寺こども政策課長>

資料に基づき、平成30年度の主な新規・拡大事業について説明。

<稲垣会長>

今回新規に取り組み、拡充していく保育というのは、国を挙げての施策でもある。子どもがいながら、多くの女性や保護者の方たちの社会参画が可能になっていくには、保育施策は欠かせない。また、子ども達が地域の中で生き生きと多様に育つことを可能にするためには、地域全体を見渡した施策の充実が必要であり、こうしたところのバランスを踏まえながら施策の充実を図りたいという報告のようにも伺った。

<米本委員>

こども園はとても見学者が多く、保育所・こども園へ入園したいという方がたくさんいるということは、現場としても実感している。こどもセンターに来ている人も、どこに預けたいかということが話題になっており、3歳児教育対象の受け入れについても関心が高まっている。この受け入れについても、現場としても、習志野市は初めての取り組みである。現在いる保育所対象児の子ども達と、幼稚園教育対象児の受け入れの子は、どの子も同じ3歳児である。子ども達の今おかれている環境とこれからおかれるであろう環境を踏まえ、子ども達がスムーズに同じ環境の中で教育保育が受けられるように、また、教育の内容や生活リズムについても子ども達に無理が無いように、みんなが個々で自覚をもって、同じ時間を過ごし、いろんなことを実体験できるような教育の指導計画等を含めて考えている。

<稲垣会長>

子ども達の居場所は変わっていくので、子ども達が安心してわたることのできる橋渡しを、私たち大人が様々な場面で考えなければならないと考える。

<伊藤委員>

私の子どもが幼稚園に通っているが、今度の年長クラスが35人、次に入る年少クラスが18人ということで、とても少なくなってきており、公立幼稚園の人气がなくなってきていると感じている。保育料については、値上がりがあり、私立幼稚園とあまり変わらなくなってしまった。公立幼稚園の先生はとてもいい先生なので、勿体ないと感じている。敷地も広く、小学校も近くにあり活気があって、とても良い幼稚園なので、よりたくさんの方がきてくれたら嬉しいと思う。

<稲垣会長>

数を増やすことも大事であるが、その資源の良さを生かすことによって、子ども達の居場所が出来るのではないかという提案だったと思う。

<高橋委員>

まず質問で、待機児童は平成29年度当初からどのくらい解消できたのか、伺いたい。

来年度に向けて、放課後児童会の職員の確保ということで、習志野市は対応が良くないということを言われていたが、これを改善する旨が入っていて良かった。

授業がわからない、学校では早寝早起き朝ごはんを推奨しているがあまり食べていない子が多い等の部分は、とてもびっくりした。他の地域とあまりかわらないということには安心したが、授業がわからないと学校に行くのはつまらないのではないかと思う。小学生はみんなと会うのを楽しみに学校へ行っているかもしれないが、早めの対応ができればよいと思う。

子どもの意見を聞くというのは、とても大事であるので、取り入れてほしい。

地域とのふれあいは、学校と地域が密着していろんな行事で大人も子どもも巻き込んでいて、良い街だと感じている。地域の方達も、学校への協力を通じて良い交流が出来ていると思う。ただ、習志野市内での地域差はかなりあると感じている。

<小野寺こども政策課長>

待機児童については、平成29年度では、施設の受け入れ定員拡大等を行ったが、現実的には338名という多くの待機児童が発生している。平成30年度の見通しについては、平成30年4月の状況でいうと、現在一次選考、二次選考をしているところだが、170名程度の数となる見込みであるので、施設の整備を行ったことによる効果はあったと考えている。一方で、施設を整備することだけではなく、

保育の質についても確保が必要だと考えている。このことも、大切な視点であるということを忘れずに取り組んでいきたい。

<芹澤児童育成課長>

放課後児童会の職員の待遇改善については、現状の支援員の賃金を時給50円上げる予定で、議会に予算案を上げているところである。

<稲垣会長>

子ども達の抱えている課題は深刻であり、抑圧の中で子ども達が暴力的な言動になったときに、指導している職員がけがをするということが、色々な教育機関や社会福祉施設でも起きている。子ども達の身の内にためてしまった棘が苦しくて外に出てきてしまったのが暴力で、子ども達が悪いわけではない。いつの間に子ども達はそんな苦しさを抱えてしまったのだろうと考え、その苦しさを軽くしていくことができるような支え方を考えなくてはならない。勉強がわからないという子どもの話があったが、理由がわからないまま大学に行っている子どもがいて、トラブルが起きていたため聞いてみると、学習障がいの中の識字の障がいがあり、学力が低いということだけではなく、文字をどういう順番でどの方向に読めばいいかがわからないという子どももいる。このため、本を読んでも知識が入れない。話を聞いて必死で覚えていたり、子どもどうして助け合いをしたり、勤を働かせてなんとかやったり等、何とか乗り越えて、高校や大学へ進学をしている子もいる。大事な指摘があったが、なかなか学力の成果が上がらない子については、学校だけに任せておかず、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、地域の様々な相談機関と連携しながら、一人ひとりのわかりづらさに丁寧にアクセスしなければならない時代になってきていると思う。何が平等で何が公平なのかというところで、資源が豊かな地域もあればそうでないところもあるとしたならば、一律習志野に同じようにサービスを提供していくことは、豊かなところはより一層豊かになり、そうでないところはあまり効果を示さないということになり、子ども達にとって公平にはならない。今後、更にこうしたことに視点を当て、今回の調査からヒントになったことや新しく重点を置いて施策を進める際に頂いた意見を踏まえ、当事者である子ども達や子ども達を預けている保護者の方たちにも意見を聞きながら、適切な施策の充実を考えていくことが必要である。

<臺副会長>

今日は、とても前向きな意見があり、いろんな発想や取り組みをされていることがわかって、これが習志野の強みであると感じた。それが発揮されたら、子ども達も幸せに生活していくことができると、頼もしく思った。

【所属課】

こども政策課

電話番号：047-451-1151（内線 442、433）

FAX 番号：047-453-5512